

Collected
Tales
of
A. Bierce



ビース選集
人生

印 検
止 廃

ピース選集②——人生 五八〇円

昭和四十六年一月三十日 初版発行

訳者 奥田俊介

猪狩 博

芹川和之

大滝伊久男

発行者 佐々藤雄

発行所

株式会社東京美術

東京都千代田区神田西町二ノ七
電話東京二九二一三三三一大代表
販替東京一三一八六

© 一九七〇年

装幀天蓋直子／編集斎藤啓子

落丁・乱丁本はお取替いたします
印刷／東京美術第一工場 製本／美成社

1397-0146-5167

人 生 目 次

131	103	89	67	57	41	23	9
情況ふさわしければ	恐るべき女	人と蛇	死者監視人	養老院入所申請人	ギルソンの遺産	ブラウンヴィル奇譚	貧民窟の男

221	215	201	191	171	157	147
解説	俄氷屋顛末記	北軍一の色事師	謎の難船	闇に光るピューマの眼	幼なじみ	ふさがれた窓

人 生



人生 [Life] (名詞)

肉体を腐らぬよう保存する精神的な漬けものこと、人間はそれを失うまいとして、日毎戦々恐々と暮らしているが、さて一旦失ってしまうとさして惜しいとは思わぬものなり。「人生果して生きる価値ありや」なる疑問は古来より大いに物議を醸してきた。就中、人生生きる甲斐なしと考える輩の間で論議の種となってきたが、その輩には、己れの見解を擁護するため長文を玩ぶが、その実、健康法を忠実に実行することによって、幾星霜も生き延び、論議が上々首尾であつたとして数々の榮譽に輝いているもの多しとか……。

「人生はかなし、そりや本当」

若き盛りがのんきに歌う

大人になつても思ひは同じ

年取りやいや増すその思ひ

八十三歳で驢馬にも蹴られりや

「すぐに外科医を呼んできておくれ」

とさ

——ハン・ソウパー

(『悪魔辞典』より)



貧
民
窟
の
男

サン・フランシスコの、大ざっぱに北海岸ノース・ビーチと呼ばれている辺り、とある四つ辻に空地があるが、それは、空地であるなしにかかわらず、その辺りの一般の地所に較べると、ずっと平坦に近い。しかし地面は、その空地のすぐうしろで、南にむかって爪先き上りに傾斜しており、その斜面は軟岩をえぐって切り開かれて三段の段地になっている。そこは山羊と貧民の住処すまひになつていて、そのそれぞれの教家族が「この市の創建以来」仲よく同居してきたのである。その最下段の粗末な家の一つは、それがどこもなく人間の顔に、というよりも、男の子がよく、べつに人類を侮辱するつもりもなしに、中空のカボチャをえぐって作る、人間の面に似ているために、人目を惹く。二つの丸窓が眼で、戸口が鼻、その下の、板を一枚はがしたためにできた隙間が口だ。戸口には上り段はない。この家は、顔にしては大きすぎるし、住居すまいとしては小さすぎる。その眼ぶたと眉毛のない眼の、空ろで無表情な眼差しは不気味だ。

時どき一人の男がその鼻から姿を現わし、ぐるりと向きを変えたと、右耳のあるべきところを通り、隣家の戸口と段地のへりとの間の狭い道をふさいでいる子供と山羊の群れをかきわけ、ぐらぐらした階段を下りて、通りに出る。ここで彼はふと足を止めて時計を見るのだが、彼を知らぬ通りすがりの人は、彼みたいな人間が時刻など気にしてどうするのか、と訝いよかるわけである。が、時間をかけて観察すれば、時刻がこの男の行動の重要な要素だということが判らう。というのは、毎年三百六十五回彼が姿を現わすのは、まさに午後二時ちょうどだからである。

時間を間違えはしなかったと安心すると、彼は時計をしまい、足早に通りを南にむかつて二丁のぼって、右に折れ、次の角に近づくと、道をへだてた三階建ての建物の上方の一つの窓に眼をじっと注ぐ。その建物は、もとは赤レンガだったが今は灰色になっていて、いささか薄汚れており、歳月と埃の影響を示している。住宅として建てられたものだが、今は工場になっている。そこで何を製造しているのかわたしは知らないが、まあ、普通工場で製造しているものと言えは知れている。ただわたしに判っていることは、日曜日を除く毎日、午後二時には、そこが活気と機械の騒音に満ちみちているということ——なにか大きなエンジンの振動が建物を揺すり、機械鋸の拷問に材木がくり返し上げる悲鳴が聞こえるということだけだ。男が期待に満ちた眼差しをじっと注ぐその窓には、何も姿を見せることはない。その窓ガラスは、實際、ひどく埃だらけになっていて、透明でなくなってからもう久しい。男はその窓を見つめるが、立ち止まることはない。その建物の前を通りすぎるにつれて、頭をだんだんうしろにめぐらすだけだ。次の角に行きつくと、左に曲がり、その一面をぐるりと廻って、やがてその工場が通りをへだてて斜めに見える地点に出る——そこは最初に通ったところで、その同じ道筋を、彼はまた辿るのだ、その窓が見えている間はいくたびとなく右の肩ごしにふり返りつつ。もう何年もの間、彼はその道筋を変えたためしはなかったし、またその行動に何一つ目新しいことをつけ加えたためしもない。十五分たつと彼はまた自分の家の口のところに戻るのだ。するとそ

の鼻のところにはしばらく前から立っていた女が、彼に手を貸して中に入れる。以後翌日の午後二時まで、彼は姿を見せることはない。

その女は彼の妻なのである。彼女は、中国人や同国人の同業者にはとても太刀打ちできぬような料金で、その段地に一諸に住んでいる貧乏人たちの洗濯ものを洗って、夫と二人の暮しを立てているのだ。

その男は年よりはずっと老けて見えるが、五十七歳ぐらいだ。髪は真つ白で、ひげは生やしておらず、いつもひげそりあとも青々としている。手は清潔で、爪もきちんと切つてある。服装の点でも、その生活環境や妻の生業が示すような彼の境遇にはまったく相応ふさわしくない、上等なものを着ている。実際、流行の、とは言えぬまでも、なかなか小ざつぱりした服装をしている。シルクハットは二年以上かぶり古したものではないし、ピカピカに磨き上げられた深靴には、つぎ一つ当たっていない。彼が毎日の十五分間の遠出に着る三つ揃いの服は、家で着ているのとは違うということだ。彼の他のあらゆる身のまわり品同様、洋服も妻が買い整え、手入れておいてくれるもので、彼女は乏しい収入の許すときには、いつも新しいものと取替えるのである。

三十年前、ジョン・ハードショーとその妻は、リンカン・ヒルの、あのかつての貴族的邸宅

地のもっとも立派な邸の一つに住んでいた。彼は昔は医者だったが、父親からかなりの財産を相続したために、同胞の病氣にかかずらうことをやめ、私事の処理に結構仕事を見つけて、それに当たっていた。夫妻はともに教養があり、その家には、夫妻のような高尚な趣味をもった人びとが交際するに価すると思うような男女の、限られた連中だけが出入りしていた。これらの人びとの知っている限りでは、ハードショー夫妻は幸せな生活を送っていたし、たしかに夫人はその好男子で、教養ある夫を熱愛し、彼のことをこの上なく誇りにしていた。

二人の知人の中にサクラメントのバーウエル一家——夫妻と二人の幼児の一家がいたが、バーウエル氏は土木鋳山技師で、出張することが多く、よくサンフランシスコにやって来た。そんな時にはその妻も大抵同行して来て、彼女の友人ハードショー夫人の家で二人の子供と一緒に過ごすのだったが、子宝に恵まれないハードショー夫人は、その子供たちが好きになった。が、不幸なことに、彼女の夫も同様に子供たちの母親を好きになった——いや、好きになりすぎてしまったのだ。さらに不幸なことに、その魅力的なご婦人というのは、賢明どころかむしろ愚かであったのだ。

ある秋の日の午前三時ごろ、サクラメント署の警官第十三号は、ある紳士の邸の裏口から一人の男が忍び出て来るのを発見、即座に逮捕した。男は——前ペリをたらした中折れ帽をかぶり、毛ば立った外套を着ていたが——見逃がしてくれれば百ドル出すと言ひ、ついで五百ドル、

さらには千ドル出すと言った。男は実際には初めに申し出たほどの金額も持ち合わせていなかった。その警官はその申し出を道徳的見地からも軽蔑して、拒絶した。警察に連行される途中、その検挙された男は、一万ドルの小切手を与えよう、それが現金化されるまで川岸の柳木立の中で手錠をかけられたまま待っていてもよい、と言った。この申し出も新たな囂りを招いただけだと知ると、男は以後口を噤んでしまい、ただ明らかに偽名とわかる名前を告げるばかりだった。

署で身体検査をしてみると、見つかった価値ある所持品といえば、バーウエル夫人、つまり逮捕現場の家の女主人の、細密肖像画だけだったが、その側には高価なダイヤモンドがちりばめてあった。そして男の上等なシャツを見ると、がんとして買収されなかった警官第十三号の胸に、なぜか空しい後悔の疼^{うず}が走った。検挙された男の衣服にも彼の身許を明らかにするものは何一つなく、男は、彼が告げた名前、ジョン・K・スミスという立派な名の許に、夜盗罪で名簿に記載された。Kというのは、きっと彼が自慢していたに違いない、思いつきの産物だったのである。

一方、ジョン・ハードショーの謎の失踪はサンフランシスコのリンカン・ヒルのゴシップを賑わし、一新聞の報道するところとさえた。だが、その新聞に同情されて彼の「未亡人」と書かれた当のご婦人は、夫が、彼が一度も訪れたはずのない町——サクラメントの、市刑務

所にいようななどは夢にも思わなかった。彼は、ジョン・K・スミスとして訴因の認否を問われたが、取調べを拒否したため、公判に付された。

裁判のおよそ二週間前、ハードショー夫人はたまたま、夫が夜盗の罪で偽名の許にサクラメントに拘留されていると知ると、そのことは口外せずに、急いでサクラメントに赴き、刑務所に出頭して、夫ジョン・K・スミスとの面会を求めた。心労に病みやつれ、首から足許まですっぱりと隠す地味な旅行用マントを着ているために、またあまりの心配にまんじりともできず、その姿のまま蒸気船上で一夜を明かしたために、彼女はまるで別人のようであったが、その姿は、彼女が熱心に口にしたどんな言葉よりも、彼女に許可を求める権利があることを雄弁に物語ったのであった。その結果、彼と二人きりで会うことを許された。

その傷ましい面会の席でどのようなことがあったのか、今までのところ伺い知ることとはできぬが、その後の成行きからすると、ハードショーはどうやら妻を説得して自分の思い通りにすることができたようである。彼女は心打ちひしがれて、質問には何一つ答えようとせず、刑務所をあとにしてわが家に帰ると、気のりせぬ態度で、ふたたび失踪した夫の調査をはじめた。そして一週間後には、彼女自身も行方を絶ってしまった。「東部へ帰ったのだ」——それ以上は誰も知らなかった。

公判では、被告は——弁護人の言によれば、「弁護人の勧告に従って」——有罪を認めた。